

「健康」に縛られず生きる

還暦を機に、妻ともども健康診断をやめました。甲府市出身の拓殖大学長・渡辺利夫さん(70)は、がん検査の苦痛と不安にさいなまれた末、人間ドックと決別した。痛い、苦しいとき以外、病院に近づかないことで「穏やかに生きることができると」ほほ笑む。老化にあらがひ、病の「虜」になるのではなく、あるがままを受け入れ今を生きる。新著「人間ドックが『病気』を生む」では、自身の死生観と客観的データから人間らしい生き方、死の迎え方を提示している。渡辺さんが勧める『「健康」に縛られない生き方』とは。(山本 久美子)

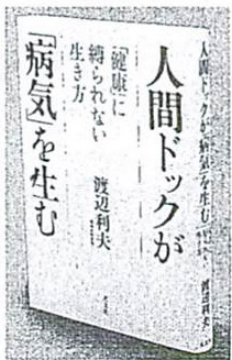
「人間ドックが『病気』を生む」を出版

拓殖大学長 渡辺利夫さん(甲府出身)



「今という瞬間を存分な力を注いで生きたい」と話す渡辺利夫さん
 甲府・山梨総合研究所

わたなべ・としおさん 1939年甲府市生まれ。慶応大経済学部卒。同大学院博士課程修了。経済学博士。筑波大教授、東京工業大教授を経て現在は拓殖大学長。98年より山梨総合研究所理事長。著書に「神経症の時代」「新脱亜論」など。



「人間ドックが『病気』を生む」
 (光文社刊)

「医療はとんでもないところまで進歩してしまっただけ。語弊があるかもしれないが、簡単に死なせてくれない。人間らしい最期を迎えることができる。がんが見つければ手術、抗がん剤、放射線治療、さらに延命のための中心静脈栄養注入、人工呼吸器……チューブにつながれ、苦痛の中で死んでいく人を多く見てきたという。」

医学的根拠も

愛煙家の渡辺さん自身、40、50代は年1回CTスキャンによる肺がん検診を受診。ある時、不審な影が見

老化排除の風潮に疑問

移している。その時点で転移しなれば転移しない。つまり、がんを発見できるのは転移の後として、渡辺さんは「早期発見、早期治療は効果がない」と主張する。もちろん治る病気は治療すべきと

移している。その時点で転移しなれば転移しない。つまり、がんを発見できるのは転移の後として、渡辺さんは「早期発見、早期治療は効果がない」と主張する。もちろん治る病気は治療すべきと

つかった。肺へのファイバースコープ挿入に加え、精密検査の結果を待つ2週間は「半病人というより強迫神経症者のような気分だった」と振り返る。「健康や長寿を追求するほど健康の観念にとられ、人生を全うできなくなるのではないか。そう考えたのが健診をやめた理由だが、医学的根拠もある。」

「健康」に縛られず生きる。あるがままに健康をやめて10年。古希を迎え、健康に不安がないわけではない。今度、病院に担がれていったときは重篤な状態かもしれない。でも不安を取り除こうとする心理が不安を増大させるんです。不安を不安として、老いを老いとして、あるがままを受け入れる生き方。そして「各臓器の機能が低下し、食欲がなくなると餓死する自然死」が理想だ。ただ生を全うするために、痛みを和らげる緩和ケアは必要だと考えている。

あるがままに